

## 『自然』という雑誌について —— 文学者魯迅と陶晶孫のかかわりに関する考察 ——

武 継 平

### Abstract

The Shanghai Natural Science Research Institute, a research institution on natural sciences located at Fenglin Bridge of the Shanghai French Concession, was established by the Japanese government in April 1931 based on the “*Cultural Affairs to China*” plan of the Ministry of Foreign Affairs of Japan. The institution mainly focused on researches on Medical Science, Biology (including Bacteriology), Geology, etc. The institution’s management and researching personnel are all Japanese citizens from mainland Japan, except for several Chinese scientists recruited from Chinese research institutions under special recommendations. The member’s club of the institution published 14 issues of literary journal named *Nature* in the 10-year period from 1935 to 1945. The author of this paper argues that, through researching on contents of the journal, we can at least understand partially the basic change of the institution from the “January 28 Incident” in 1931 to the time of Japan’s surrender. In this paper I will try to unveil the special relationship between Xun LU, the Litterateur, Jingsun TAO, a famous writer of the Creation Society and the institution before and after the “July 7 Incident”, through investigating different ways of participation by Chinese writers to the journal. By doing so I will clarify their respective views of Japan.

### はじめに

1930年代初頭から終戦までの15年間のあいだ、東洋の「魔都」と呼ばれる上海市の徐家匯フランス租界内の楓林橋と呼ばれる長閑かなところに、日本政府が設立し、独自に運営する自然科学研究所があった。医学、病理学、地質学、生物学（細菌学）などの研究がメインで、様々な科学研究が行われていたが、研究所所長はもちろん、研究員スタッフも基本的には日本から派遣されてきたものだが、中国側の研究機関から招聘し、そして現地採用した中国人研究者もいた。本論文では、その間同研究所から発行された『自然』という雑誌を手掛かりに1932年1月の「第一次上海事変」<sup>1</sup>、1937年8月の「第二次上海事変」<sup>2</sup> および太平洋戦争時の当該研究所の変化、そして中国有名文化人の同研究所の人々との付き合い、さらに雑誌『自然』への種々様々なかかわり方を考察することで、日中間に戦争の暗雲がのしかかっていた時代に上海自然

1 1932年1月～3月までの間上海共同租界周辺で起きた日中両軍の衝突事件。この事件で日本は海軍陸戦隊の上海増兵を果たした。

2 1937年8月13日から始まる日中両国正規軍の正面衝突。また「上海戦」、「淞滬会戦」ともいう。

科学研究所という人間ドラマの舞台をめぐる両国文化人の錯綜した複雑な思いや行動を実証的に明らかにしたい。

本研究に関する先行文献としては、従来「対支文化事業」や上海自然科学研究所に関する文献は、決して多くはないが、学術的な価値は高い。佐伯修と山根幸夫両氏による長年にわたる綿密な調査研究のおかげで、『上海自然科学研究所——科学者たちの日中戦争』（佐伯修著、宝島社1995年）と『東方文化事業の歴史——昭和前期における日中文化交流——』（山根幸夫著、汲古書院2005年）という二冊の単行本がすでに出版されており、当時日本政府の「東方文化事業」との関連や研究所の設立の経緯などには詳しい。山根幸夫論文「上海自然科学研究所について：対華文化事業の一考察」（『東京女子大学紀要論集』30）、八耳俊文論文「上海自然科学研究所科学科の人々の戦後」（青山学院女子短期大学総合文化研究所年報 16）、李嘉冬論文「新城新蔵と日本の東方文化事業——上海自然科学研究所長時代の活動を中心に——」など挙げられる。小論は、それらの先行文献から多々なる示唆を得たことは否めない。

ところが、従来の研究の中で、本論文が主な調査対象とした基本史料『自然』に触れた論文は皆無だといっても過言ではない。自然科学研究所から生まれた雑誌から歴史を垣間見ることはいうまでもなく価値あるものと思われるが、激動した時代に親しい友人が一夜にして敵国人に変身させられ、「国」という得体の知れないものに翻弄される日中両国知識人の運命の儚さを見るのも意義あるものであろう。

## 一、上海自然科学研究所と雑誌『自然』の創刊

日本政府の「対支文化事業」は、戦前から敗戦まで日本国最大規模の対外文化事業であった。事業内容としては、中国での日系諸団体による社会活動への資金援助や、日中間の交換留学の促進などとされるが、いわゆる「コア事業」は、北京人文科学研究所・上海自然科学研究所・東方文化学院といった学術研究機関の設立および運営であった。小論では専ら上海自然科学研究所に関連することについて調べているので、北京人文科学研究所と東方文化学院のことに關しては、今回は考察の対象としない。

では、上海自然科学研究所とはそもそもどんな研究所なのか。そこにどのような科学者たちがいたのか。

調べて判明したことだが、「上海自然科学研究所」は、固有名詞として日本政府が「対支文化事業特別会計法」（1923年制定）に基づいて、1931年4月に中国の上海で設立した総合科学的研究機関のことを指す。設立と運営財源は「辛丑条約」により清国政府が日本に支払った「義和団賠償金」をあてていた。日本国の「対支文化事業」の一環として、「自然科学の純粋学理を研究するを以て目的」とし、また「中国人の高遠なる自然科学研究の能力を増進し、以て支那の自然科学の発達を図る」ことに主眼とする日中共同運営が本来の趣旨だったが、北伐戦争後新たに誕生した蒋介石が主導する南京政府の反発で、かつて日本政府と北京北洋軍閥政府との間に約束された「対支文化事業」の共同運営は難しくなった。そのため、その後事実上日本国の単

独運営となったのである。つまり、1931年4月に発足した上海自然科学研究所は設立当初から日本政府の単独運営だった。同所は太平洋戦争勃発2年前に興亜院に管轄が変わるが、1945年9月に中華民国政府に接收されるまで日本国の一在外研究機関として十分機能していた。

上海自然科学研究所が設立され、管轄は東方文化事業上海委員たちにされるとは言っているが、事実上、外務省東方文化事業事務局に一任されている。外務省の「対支文化事業」の重要な一環である「上海事業」が発足してまもなく、1926年12月5日に開かれた第一回上海委員会では、「上海自然科学研究所組織大綱」が定められた。主な内容は下記の通りである。

- (1)「上海自然科学研究所は自然科学の純粹学理を研究するを以て目的とする。」
- (2)「上海自然科学研究所は支那人の高速なる自然科学研究の能力を増進することにし、以て支那の自然科学の発達を図る。」
- (3)「研究所は理学部と法学部に分け、理学部に物理学、化学、生物学、地質学を、また学部

に病理学、細菌学とを設ける。」

この組織大綱で、筆者は同研究所設立当初の輪郭を把握することができた。

では、本研究の主な依拠となる『自然』とは、またどのようなものだったのか。それはどのように生まれ、そしていったいどのような性格を有する雑誌なのか。ここでまず整理してみたい。

本論文で取り上げられる『自然』という名前の雑誌は、1935年から1944年までの間上海自然科学研究所から発行された二つの逐次刊行物の一つである<sup>3</sup>。一次資料としては、この雑誌は現在、日本で全巻所蔵しているのは東大東洋文化研究所一箇所しかない。国立国会図書館では第12～14号、東洋文庫では創刊号を欠号している状態である。今回の調査で使用した史料は中国科学院上海生理研究所図書館所蔵の『自然』雑誌の現物である<sup>4</sup>。現物というのは、同研究所は民国政府が日本敗戦後接收した上海自然科学研究所そのものであり、図書館は一般市民の利用は許されていないわけではないが、旧研究所図書室の蔵書や戦前の資料は別の書庫に入れて厳重に保管されているからである。

『自然』は上海自然科学研究所から発行された雑誌というのがわかるが、同所のどの部署が発行したのか、逐次刊行物といっても三ヶ月毎に出すのか、それとも年に一度だけ出すのか。

『自然』という雑誌は、上海自然科学研究所倶楽部学芸部によって昭和十年（1935）六月十日に創刊されたもので、最初の発行計画は半年刊を目指していた。創刊時の編集責任者は同研究所図書館司書を務める西村捨也氏だった。『自然』は、1935年6月に出た創刊号から1944年11月の第14号まで9年間余りの長きにわたり、どんな困難な事情があっても少なくとも年一回発行のペースは保たれていた。

---

3 もう一つの定期刊行物は『上海自然科学研究所彙報』である。それは研究所が編集した理・医学研究の紀要のような定期刊行物で、東京丸善株式会社から発行されたものである。

4 上海自然科学研究所は日本国敗戦後蒋介石政府に現状接收されたため、建物も図書館もそのまま残された。現在の中国科学院上海生命科学研究院植物生理生態研究所は昔の自然科学研究所の本館にあり、図書館は大きく増築されたが接收された図書史料などは書庫に眠っている。その部分の一般公開はされていない。

創刊の目的や経緯に関しては、李嘉冬「新城新蔵と日本の東方文化事業——上海自然科学研究所長時代の活動を中心に」<sup>5</sup>では、「内外交流を一層増進するため」の「研究所倶楽部の半公的機関誌」というふうに位置付けられている。しかし、筆者の調査によると、同研究所には倶楽部が二つあり、研究所スタッフ全員が入会できる倶楽部ともう一つ「日本人倶楽部」が存在していた。創刊号に掲載された倶楽部総会議事録によれば、所員であれば誰でも入会できる倶楽部の下には運動部、学芸部、娯楽部そして慶弔部の四つの部が設置されているということだった。学芸部には「学芸会」があり、『自然』はまさに研究所スタッフ倶楽部に所属する学芸会から発行された、「年一回以上の定期刊行の具体的意向は持たない」「学芸会会誌」のようなものにすぎなかった<sup>6</sup>。そういう意味では、前文に言及した「研究所倶楽部の半公的機関誌」という定義は正確さを欠いているようには筆者は思う。

創刊の動機については、同研究所二代目所長の新城新蔵氏は倶楽部学芸会の「会長」を務めており、同氏は創刊号に寄せた「発刊の辞」の中で「我が研究所員数十名、其集団生活の内容を豊富にせんがために、相謀ってクラブを作り、次て其機関として一の会誌を発行せんとするに至ったのは、固より自然の勢である」と述べ、雑誌名の由来については、「やがて其会誌の命名を予に求められたので、左思右考、遂に窮余の一案として、自然科学研究所の頭の二字を取り「自然」と命名するに至ったのは、果たして自然的なるや否やを知らない。思ふに花に鳴く鶯、池に住む蛙、いづれか歌を詠まざりける。相携へて共に東洋の自然を研究せんとする人々の詠嘆感慨の発する所、柳櫻をこき交せて春の錦を織り成すに至らんことは、極めて自然の勢として期待さるる所であらう」というふうに明言している。雑誌の創刊を発案した研究所の長が文学的な性格を重視していた、という点是一目瞭然である。

創刊号に関しては、表紙には、第1号（昭和十年五月）となっており、「編集後記」にも「五月九日」と記してあるが、実際は同年六月十日に発行されたのである。創刊号の編集者はとくに記されていないが、「編集後記」の署名は「西村」と「野口」の二名となっている。「非売品」や「禁転載」と明記する著作権ページでは西村捨也一名のみが編集兼発行者となっている。

野口氏の「編集後記」で『自然』の創刊が成功に至る複雑な経緯は明らかになった。

まず一つ目は一年前の昭和九年の春には所内の回覧誌を発行する計画が立てられたこと。

二点目はその計画が「流産の憂目になってしまった」原因は予算が取れなかったためだったということ。そして一年後一度「流産」となった「懸案」が再度浮上したのは、「総会の決定を得た」おかげで予算が取れたからだということ。

三点目は雑誌の分量。最初は「六十頁くらい」を予定していたが、投稿メ切まで原稿が集まらず、再募集をかけたら今度は予定よりも五十余頁も増え、百十数頁の大量となった。

四点目は創刊号の成功で関係者一同は、予算さえ取れば今後年に一回以上の定期刊行物に

5 京都大学大学文書館研究紀要（2010）, 8: 21-34.

6 『自然』創刊号「編集後記」。創刊号に掲載された倶楽部総会備忘録によれば、学芸部の役員は3名いるが、1934年1月10日に開催された倶楽部第2回総会で選出された学芸部役員は木村重、西村捨也と小宮義孝の3名だった。



したい、そして倶楽部全員の支持が得られれば年に二回乃至四回くらいの発行実現の将来ビジョンも持っていたこと。

## 二、『自然』の題字から見た文豪魯迅の関わり

『自然』創刊号から第14号まで、表紙には二種類の字体が使われている。創刊号から第5号までは筆で書かれた題字であり、第6号から第14号までは極太の活字に変わっている。ほかに第2号にも筆で書かれた題字らしきものが見うけられるが、表紙にではなく、扉のページに組まれているので、一時的なものとして見てよからう。

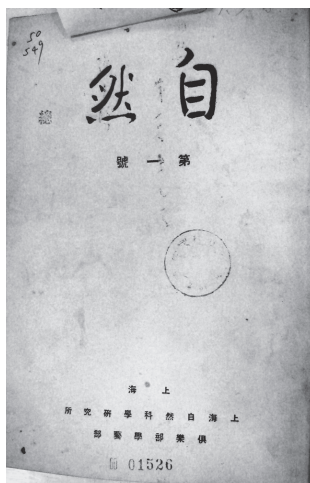
では、まず創刊号などに使われた題字について考察しよう。

創刊号の表紙には筆で書いた縦二センチほどの「自然」の二字がまず目に付く。誰の揮毫によるものかは表紙を見ただけでは判断できない。しかし、目次と「編集後記」にはこの題字に関する情報がある。揮毫者は同時代中国の文豪といわれる魯迅だった。編集者野口は「編集後記」にこう綴っている。

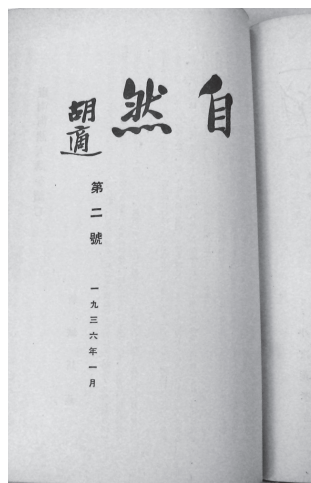
「表紙題字のご執筆を早速ご快諾くださった中国文壇の巨匠魯迅先生及びそのご斡旋の労を頂いた内山完造氏に対し深甚の謝意を表します。」

魯迅に題字の揮毫を依頼した経緯については、従来二種類の説が存在する。前掲李論文では、「(1935年6月)から第5号(1937年5月)まで表紙を飾った題字は魯迅によるもので、雑誌編集者の研究所図書館司書・西村捨也が内山完造を介して魯迅に依頼したという」と主張している。『自然』創刊号の「編輯後記」を根拠にしているらしい。引用原典を調べたら、西村は「研究所図書館司書」と「雑誌編集者」の二点は事実合う。しかし、同じ原典である「編集後記」では、西村は自分が魯迅に依頼したなどとは言っていない。誰かが依頼して、実際創刊号の編集にあたった西村が編集部一同を代表して揮毫者に対して謝意を表すというのも理にかなっていると思われる。では、依頼者は誰だろう。

もう一つは、『自然』創刊号編集委員を務めた木村重氏が直接魯迅に依頼したという説である。木村氏が書いた魯迅回想記『上海の魯迅さん』では、彼は「自然科学研究所にいた頃『自然』という同人雑誌を出していたんです。その題字を魯迅さんにお願ひしました。ああいよいよ、気軽に引き受けてくださって、内山書店で書いていただきました」。当時魯迅には「お礼をしていないんです。できた雑誌を届けただけ。創刊号の一冊だけです」<sup>7</sup>と言っている。



魯迅の題字



胡適の題字

『自然』創刊号に掲載された倶楽部雑記によれば、創刊号を出す準備段階では総会で三名の学芸部委員が選出されたという。西村捨也、小宮義孝、木村重三名の名前が確認できた。この三名の中で雑誌の編集に携わり、しかも魯迅とある程度の親交を持ち、そして内山書店の店主とも知人関係にあった、という三条件が揃っていたのは木村重氏だけであった。

単純に状況判断すれば、木村重の回想記は最も信憑性が高い。つまり、彼が魯迅宅に訪ねまたは内山書店の二階で魯迅と会い、その場で揮毫してもらった、という筋書きは一番合理的かもしれない。

さて、依頼者はいったい誰なのかはともかく、第4号（1936年11月）は同年10月19日に魯迅没後に発行されたのだから、翌年の5月に出た第5号にも魯迅の題字が使われた、そしてそれが最後だということは記念する意味合いがあろう。当事者たちの回想記によれば、西村は題字の直筆を預かったまま研究所を退職し、それを個人蔵書と一緒に日本に持ち帰って浅草の古書肆「浅倉屋」に預けておいたが、1945年3月10日の東京大空襲の際焼失してしまった。この魯迅の題字は『自然』の他に、陶晶孫と仲が良く、特に中国文学の愛好者である同所病理学科研究員小宮義孝の『遺稿・追憶集』の装丁にも使われ、その外函を飾った<sup>8</sup>。（魯迅の字「写真1」）

魯迅は、上海自然科学研究所倶楽部学芸会同人誌『自然』のために題字を揮毫した以外にも、同研究所にはなんらかの形で関わりを持っていた、と従来言われている。

まず一点目、前掲書『上海自然科学研究所——科学者たちの日中戦争』の中で披露されたことだが、研究所図書館司書だった西村捨也の記憶によれば、魯迅は研究所を訪問したことがあるとっている。正確な年月日は覚えていないが、「青い長衫（チャンサン）姿の魯迅が天井の高い研究所の薄暗い廊下を事務所の職員に案内されて歩いている」面影は西村は忘れられないという<sup>9</sup>。

いっぽう、当事者の魯迅の方で何か手がかりは得られないのかと、筆者は『魯迅日記』と『魯迅書簡』を丹念に調べた。

不思議なことに、上海自然科学研究所が1931年に開所されてから魯迅が亡くなる1936年10月までの間、同研究所の人との付き合いに関する記録は理学部地質学科所属の清水三郎研究員に関するものしか見つけることができなかった。清水は元東北帝国大学出身の地質学博士だった。研究所開所時には同所にいたし、魯迅が亡くなって何年もそこにいた。

膨大な『魯迅日記』や『魯迅書簡』をしらみつぶしに調べても、「清水」という苗字の日本人は「清水」、「清水安三」また「清水三郎」というふうには三種類の呼び方があることに気づいた。さらに深く掘り下げてみると、1920年代の魯迅日記に登場してくる「清水」は、魯迅が北京に住んでいた時期付き合っていた日本組合基督協会宣教師の清水安三氏のことで、そして魯迅が上海移住後の1931年以降の日記に出てくる「清水」は上海自然科学研究所の地質学研究員清水三郎氏である、ということは判明した。前者の清水安三は中日両国で教育者としても有名であ

7 魯迅友之会編『魯迅友の会会報』57号、1973年8月。山口大学図書館所蔵。

8 曾田長宗・国井長次郎編『小宮義孝＜自然＞遺稿・追憶』土筆社1982。

9 前掲佐伯修著『上海自然科学研究所——科学者たちの日中戦争』p138。

り、1921年北京で女子教育のための崇貞学園を創設し、中国人、朝鮮人、日本人を分け隔てなく教育した「北京の聖者」とさえ呼ばれていた人物であった。この清水安三氏は1976年に書いた魯迅逝去40周年記念回想記に、「『魯迅日記』に出てくる日本人の名前をいうなら、最も多いのは山本夫人で、その次はわたくしである」<sup>10</sup>と書いている。中国の文豪魯迅との交友関係を自慢する意図があろうが、あきらかに事実と異なる。他の外国人に関する記録はともかく、「清水安三」のことだと裏付けがとれる箇所は1923年1月20日、同年8月1日と1924年5月7日の三箇所しかない。

対して上海自然科学研究所の清水三郎に関する記録ははるかに多い。日記には1931年一年間で22回、1935年1回計23回もあり、その間、日本人弟子の増田渉氏への手紙の中で「地質清水様とはもー活動写真屋で一度過ごしました」と書いている<sup>11</sup>。

魯迅日記によれば、清水三郎は、増田渉氏の紹介で魯迅と知り合った。その後足繁く魯迅宅を訪れるし、魯迅のほうから清水の自宅を訪ねて行くケースも何回かあったということだった。この地質学の清水三郎博士は1938年3月31日付で研究所を退職し、その後朝鮮無煙炭株式会社へ入社したということは今回の調査で判明したが<sup>12</sup>、上海にいた彼と魯迅との間に、何年も続いた交友関係は一体どんなものかを解明するには、極めて簡単な往来記録しかない魯迅日記以外に、清水日記や回想記などその内容を示す新たな文献が発見されるのを待つしかない。

魯迅日記や書簡などを調べる際、もう一つ気になることがあった。それは、同研究所図書館司書西村捨也の名前はまったく出てこない、ということである。『自然』の研究所「雑報」には、1935年6月3日、『自然』創刊号が出る一週間前に学芸部は内山完造氏を招き「支那漫談会」を同所三階会議室で開催したことも、1937年12月29日に魯迅と付き合いのある改造社山本実彦社長の研究所来訪も詳細に記録されてある。にもかかわらず、魯迅が同研究所に足を運んだことがあるということを示す記録は皆無である。

『自然』の表紙にある筆で書かれた題字は結局魯迅が揮毫した字が使われていた。創刊号から第5号まで採用され、そして特別扱いで新城所長追悼の特集を組んだ第8号にも使われた。第6号からは基本的には緑地に白抜き楷書印刷体太字か、または白地に楷書印刷体太黒字が使われていたのである。

魯迅の題字をめぐって、倶楽部内で意見が早くから出ていた。それに対して、学芸会役員であり主任編集員でもある西村氏は、「内容がある程度まで外観体裁を規定してしまうことは雑誌編集に於いても真である。本誌の領域も役割もどうやら判ったように思われるし、形式もそれに従って一つの態をなしたかと思うのである。尤も将来のことは云えないが、本誌の立場としてはこの面目を固守することの方が賢明であるやうだ」と一蹴し、さらに新城所長の支持を得たので、魯迅の題字の採用は第5号まで可能となったのである。

このように愛され続けた魯迅の題字に比べて、新文化運動の旗手ともいべき胡適氏の題字

10 1976年10月19日『日本経済新聞』朝刊。

11 『魯迅全集』16巻 p505。1933.3.1魯迅書簡「増田渉へ」、学習研究社昭和61年5月6日出版。

12 『自然』第8号 p109、研究所「雑報」による。

は第2号の扉にたったの一度しか使われなかった。単純に書道の腕でいうならいうまでもなく胡適の字が一枚二枚も上だといわれても仕方がない。それでも魯迅が亡くなる年まで彼の字が愛用されていたということは、上海自然科学研究所にいた科学者たちの多くは中国文学者魯迅のことを心から愛していた、ということをも物語っているのではないだろうか。

### 三、魯迅と上海自然科学研究所の科学者たちとの交友関係

以上挙げてきた事例の他に、魯迅が同研究所の他の人物との付き合いもあった。そのことを示す史料は同所の理学部生物学科にいた木村重研究員の回想記「上海の魯迅さん」<sup>13</sup>である。

外務省記録を調べてみると、木村重は開所時からいた理学部生物学科所属の3名の日本人研究員の一人であることが判明した。研究所彙報に頻繁に発表される研究報告をみて、木村氏は魚類研究者としてよくフィールド調査で中国南北の河川を調べに出掛けるため研究所不在の日々が多かった。魯迅日記や書簡に全く名前が出てこない彼は、研究所を離れた28年後に書いた回想記の中で、1931年前後は内山書店が本店を構える北四川路（共同租界区域）にかなり近い「施高塔路（スコット路）」に借家をして住んでいて、徐家匯にあるフランス租界区域内にある自然科学研究所には専用バスで通勤していた、と振り返っている。

木村回想記によれば、「三十にもならない若僧の」彼は借家の近くにある行きつけの本屋内山書店で店主内山完造に紹介されて「五十歳を過ぎておられた」魯迅と知り合ったのである。初対面の魯迅印象は「藍色の袖口の長い長衫（チャンサン）を着、木綿のフェルト靴をはいた、無精ヒゲの小柄な爺さん」だった。そもそも魯迅という名前は中学校で翻訳小説『阿Q正伝』を読んだ時から記憶にあった。高校の時魯迅の書いた『藤野先生』も読んだ。魯迅と知り合ってから魯迅宅を度々訪ねて行ったりして、おかげで魯迅が文豪だけでなく、実際は動植物のことにもかなり詳しい、ということも知ることができた。木村は「私は文学者としての魯迅ではなくて、生物学のお付き合い、お付き合いなどどいっちゃあ、甚だ申しわけないんですけど、そういうお付き合いを、しちゃったんでございます」。「普段着のままの、隣同士の人間、そんなような形でお付き合いした」と語った木村は「私は、普通の人間としての魯迅さんしか、知らないんでございます」といっている<sup>14</sup>。

「私が偶然、魯迅さんと一つの屋根の下で暮らすことになった」、と木村はいう。そもそも木村一家が第一次上海事変後内山書店店主内山完造の世話で狄思威路776号にあるアパートに住み込む、まもなく（およそ同年2月末か3月の初め）内山書店に行った際、店主から「今度お宅の二階にね、周さんが行きますからよろしくお願いします」と言われたあと、魯迅が引っ越してきた、と木村は回想している。

木村の『上海の魯迅さん』によれば、それからおよそ一年間、子供好きな魯迅はときどき訪

13 同注7。

14 同注7。



ねてくる。木村も魯迅の部屋に何度も行った。そこで許広平夫人にも会った。その後木村の次男坊が赤痢を患い、不治で死んだが、わざわざ魯迅先生に弔慰文を書いてもらった。しかしその追悼文の現物は戦後の混乱の中で全て紛失してしまった、ということである。

これらのような、第一次上海事変後に自分自身の身辺事を綿密にしかもこと欠かさずに記録しておく習慣のある魯迅は、近所に住んでいて一年間以上のお付き合いがあり、さらに当事者が自ら「悪い弟子」と称し、「魯迅さんから親切に色々教えていただいた」<sup>15</sup>と回想記で感無量の言葉を述べる上海自然科学研究所の魚類研究専門家木村重研究員のことについて、『魯迅日記』や『魯迅書簡』に何故か片言も書き記さないでいた。不幸にして病死した木村重の次男坊のために追悼文を書いたことへの言及は全くないし、それどころか、有名な日本人魚類研究者木村重の存在を思わせる人物が1932年魯迅の身辺にいた気配さえ感じさせてくれないのである。魯迅はほぼ毎日のように内山書店に行っていることや、事変発生前後施高塔路（スコット路）の借家の暮らしなど毎日かかさずに書く日記には何気なく触れてはいるが、木村重のことにもその家族のことにも全く触れていない。

丹念に調べていくと、魯迅は「木村」という苗字の日本人に数回言及したことがわかった。しかし、『魯迅日記』や書簡に登場してくる木村という人物は、上海自然科学研究所と何の関係もない文学者木村毅だったり、上海で個展を開く日本画家の木村響泉だったりして、有名な魚類研究家の「木村重」ではなかった。木村重は「魯迅さんは中国の古書を非常によく勉強されて」、魯迅の推薦で中国の魚類専門古書を買集めていた、と前掲回想記に書いているが、同じ時期の魯迅日記にある「書帳」を調べると、1932年一年間だけで魯迅も多くの生物関係図書を購入していたことがわかった。言ってみれば、木村重が言及していた「付き合いのある」その時期、魯迅も生物には大変関心を持っていたらしい。それらの図書は木村重の推薦で購入された可能性は極めて大きいと筆者は考える。史料を分析し、また総合的に判断をすれば、木村重が明らかにした魯迅との付き合いはほぼ間違いなく事実であろう。自然科学者だから専門違いの魯迅の日記には出てこなくても納得がいけないことはないが、しかし、同じ自然科学者の清水三郎との交友事例を見たら、それは説得力がなくなる。

前文で触れた清水三郎と木村重との間には、二つの共通点が存在する。一つは同じく上海自然科学研究所の専任研究員、もう一つは二人とも自然科学の専門家であること。なのに、日常魯迅との付き合いが遥かに多い木村のほうは魯迅日記の中で全く触れられていない。木村は内山完造の紹介で知り合い、清水三郎は増田渉が連れてきた人物だった。紹介人としては内山も増田も魯迅は十分信頼している。それなのに、木村と清水とに対して、魯迅の扱い方は何故あんなに驚くほど温度差があったのか。それにはきっと何か特別な原因があるに違いないと筆者は思わずにはいられない。

現段階では推測しかできぬが、何かの原因で木村重氏に関する記録（日記または書簡）が魯迅本人によって事後に消された可能性はないのか。あるならその原因はいったい何だったのか？

---

15 同注14。

#### 四、魯迅日記や書簡に見る日本観の変化

まず魯迅日記にある上海自然科学研究所に関する言及を見てみよう。

##### 一、『魯迅日記』（1930年）<sup>16</sup>

「十月二十八日曇。内山書店へ行き、『上海自然科学研究所彙報』二冊（四および五）計五元六角を買う」。

##### 二、『魯迅日記』（1936年）<sup>17</sup>

「七月二十九日。晴。暑し。午前、『自然』（三）一冊を受けとる」。

上海自然科学研究所から発行された雑誌に関する記述は、『魯迅日記』に以上の二カ所しかない。まず時間的にはおかしいと感じた。というのは、同研究所が正式に開所されたのは1931年4月だった。しかし、魯迅はその前の年（1930）に同所の『上海自然科学研究所彙報』の四と五を購入したと記述している。時間的にはほぼ一年間のズレがあるのではないか。

ところが、さらによく調べていくと、同研究所は正式に開所される前に、いわゆる「予備研究期間」が設けられていたことが判明した。これで上海自然科学研究所が正式に開かれる2年前の1929年の4月に『上海自然科学研究所彙報』の創刊号（第1巻第1号）が出ているという謎が解けた。魯迅が1930年の暮れにその研究所彙報第1巻第4号と第5号を購入したというのも別に不自然はない。

ところが、魯迅日記は従来日々の些細な出来事でも漏らさずに書き記しておくことで有名だが、雑誌『自然』に関する記述はあまりにも少なすぎる。それは、1936年魯迅が病死する2ヶ月ほど前に日記に書き記した「『自然』（三）一冊を受けとる」という一言しかなかった。『自然』が1935年4月から創刊され魯迅が病死する翌年10月19日まで第4号まで発行された。そして魯迅の題字は第5号まで同誌の表紙に使われていた。一方、同じ上海自然科学研究所の雑誌で、『上海自然科学研究所彙報』は「買う」と書き、『自然』は「受けとる」という表現を使い分けている。そもそも創刊号から雑誌の表紙に魯迅の題字が採用されているのだから、依頼を受けたことの一部始終また数名の関係者との付き合いなどは多少日記で触れてもいいはずだし、しかも創刊号から毎号一部贈呈されても理にはかなうと思われる。ところが、何故か第3号のことしか、しかも僅か一言しか言及されなかった。木村は創刊号を一部贈呈したと言っているが、魯迅日記には記録がない。

その原因について魯迅本人が口を噤んだからには我々は推測や分析で状況判断するしかない。そのような不可解な魯迅の行為はあくまでも保身のためだと筆者は考えたい。『魯迅日記』や書簡などに、特に第一次上海事変前後の中日関係をめぐって魯迅は非常に神経質で且つ曖昧な態度を取っていた、ということは魯迅書簡や日記のところどころで確認できる。日本人との交友関係は従来通り保たれるが、緊迫した中日関係につながることでとなると、急に極端に言葉が少

16 『魯迅全集』18巻、p337。学習研究社昭和60年11月20日出版。

17 『魯迅全集』19巻、p203。学習研究社昭和61年8月25日出版。

なくなる。

伊藤虎丸氏は嘗て、「魯迅はその死に至るまで、日本および日本人に対して、ある種の信頼と愛情を持っていたということである。しかし同時に彼は、当面の日中関係については絶望していた」と書いたことがある<sup>18</sup>。まさに伊藤氏の指摘の通りで、戦争の暗雲が日中両国にのしかかっていた頃、魯迅の日本観および日本人観は微妙に変化していたのである。

ここで1932年6月に魯迅が台静農へ宛てた二通の手紙を引用したい。

一、<1932年6月5日『台静農へ』><sup>19</sup>

上海はほんとうに危ないところで、殺気がみなぎっており、商業の種類も大変多く、人間の頭も商品の一つです。これを売って生活する者が、実にやたらにおり、幸いにも生き残っている者はたいてい偶然にすぎません。今年の春はたまたま火線にいて、大殺戮を目睹し、特に危険でしたが、なんとか免れることができました。なにか書き記しておきたいとおもうのですが、まことにどう書き出せばいいのかわからないというところです。

二、<1932年6月18日『台静農へ』><sup>20</sup>

“一二八”のことは、書けることもいくらかありますが、見たことがやはりあまりにも少なすぎるので、書くかどうかまだわかりません……。今日の<申報>の「自由談」には、「モダンな救国青年」の一文が載っていますが、そのなかの一段にこうあります——「ミス張は、国恥を記念して、わざわざ銀細工店に抗日救国の四字を彫った純銀の小箱を注文して作らせた。彼女は仁丹をのものが好きで、花の前、月光の下、……にたたずむと、いつも彼女は抗日救国の銀の小箱から何粒かの仁丹を振り出し、ゆうくり噛みしめる。かみながら、こうのべる、「女性同胞よ、耳をかたむけよ！ 九一八と一二八を忘れず、抗日救国せよ！」

一二八以前には、こんな類の人たちはたしかに多くいました。しかし一二八のとき、持ち物にこんな文字をならべている者は、生きているのが極めてむずかしかったと思います。うわついで「抗」すれば、確実に殺される、この事情は今でも多くの人々がまだ悟っていないようです。今になっても、中国は戦死した兵士、殺された人民の人数を発表していないとすると、芝居すらできなくなりました。

僅か二週間足らずの間、魯迅の中には密かにある種の変化が生じている。6月5日の時点では、「今年の春はたまたま火線にいて、大殺戮を目睹し」たと書いたが、誰による「大殺戮」なのかははっきり触れていない。しかし、6月18日になると、背景は「一二八」、「抗日救国」とはいえ、「抗すれば確実に殺される」とはっきりと書いたのである。「一二八」とは、1932年1月28日に起きた「第一次上海事変」のことを指す。事変発生した三日後、日本憲兵隊は魯迅の

18 『魯迅と日本人——アジアの近代と「個」の思想』<朝日選書228>、朝日出版社1983年4月、p21。

19 『魯迅全集』14巻、p578。学習研究社昭和60年6月25日出版。

20 『魯迅全集』14巻、p582。学習研究社昭和60年6月25日出版。

家宅搜索をした。事前にそれを知った内山書店の店主内山完造氏は魯迅一家三人に自宅を脱出させ内山書店内に一時避難させ、2月6日から中日両国軍停戦した3月中旬までの間、魯迅とその家族をイギリス租界にある内山書店の支店に匿った。

当時内山書店で働いていた日本人店員鎌田壽氏の回想記によれば、第一次上海事変前後、「内山書店は北四川路底、施高塔（スコット）路にある。魯迅一家は北四川路にある北川アパートの三階に住んでいた。そこは内山書店から100メートルもないところにあり、道路の向かい側は工部局が設立した大学予備校で、左手は日本海軍陸戦隊本部だった」<sup>21</sup>。

事変発生時のことを魯迅は友人宛の書簡の中で次のように描いている。

「このたびの事変は、まことに思いもよらぬもので、突如として火線に陥り、血ぬりの刃が途を塞ぎ、飛びくる丸が室に入ることになり、ほんとうに命は旦夕に在りといった腹づもりをしました。2月6日に、やっと内山君が方法を講じてくれ、妻子を引きつれ英租界に入ることができました」<sup>22</sup>。

同じ鎌田氏の記述によれば、イギリス租界にある内山書店の支店は「古い五階建ての洋館の三階の一室で、普段だれも住んでいない」<sup>23</sup> ところだった。魯迅とその家族がそこに避難していた1ヶ月の間、まさに奇縁としか言いようはないが、そこで自然科学研究所の魚類専門家木村重研究員と知り合ったのである。内山書店の支店に住む1ヶ月は魯迅にとって、生物という共通の話題と趣味を共有し、戦争避難時の過度の緊張を和らげてくれた日本人木村重氏が一生忘れることのできない特別な存在だったはずだが、魯迅日記や書簡に全く言及されていない。この点に関しては、筆者は魯迅本人による意図的な「記憶抹消」であると思わずにはいられない。

かつて毎日のように内山書店に行き、その二階で様々な日本人と会い、そして内山店主が主催する「文芸漫談会」で歓談していた文豪魯迅は、なぜ上海事変後交友中の日本人に警戒心を抱くようになったのか。

1931年初頭の魯迅は上海にいる自分の居辛さについて吐露したことがある。「実のところ、わたしは上海にきて以来、攻撃されない時はなく、毎年やはり必ず何回かデマが流れます……」<sup>24</sup>。

ここで言った上海で受けた「攻撃」とは、上海事変が勃発するまで様々な日本人と交友関係を持ち、公の場に頻繁に出入りしていた魯迅が、「愛国文学青年」たちに何度も「売國奴」呼ばわりされたことを指す。それまでは相手にせず気にもしなかった人身攻撃だが、上海事変で日本軍が上海市内にまで攻めてきて、実際多くの市民が砲撃の中で血まみれになって命をなくしてしまったことを目の当たりにした魯迅の中には、従来の日本観が変わり始めた。いかにも前文で触れた伊藤氏の指摘のように、「信頼と友情」から一気に「絶望」に変わったのである。

従来の魯迅研究の中で、魯迅は日本に、そして日本人にだけ不満をこぼしたことがない多くの中国人は批判的に見ていた。しかし、上海事変前後の魯迅日記や書簡を読めば、それはナ

21 鎌田壽『魯迅とわたし』、『外国人憶魯迅』p184、武徳運著、北京図書館出版社1998年1月。

22 『魯迅全集』14巻 p552。1932年2月22日「許寿裳宛」、学習研究社昭和60年6月25日出版。

23 前掲鎌田壽文『魯迅とわたし』、『外国人憶魯迅』p185。武徳運著、北京図書館出版社1998年1月。

24 『魯迅全集』14巻 p512。1931年2月2日魯迅書簡「韋素園宛」、学習研究社昭和60年6月25日出版。



シヨナリズム的な見解に過ぎないことがわかる。

1932年初頭の上海事変で、上海商務印書館の閘北印刷工場、編訳所および東方図書館など数カ所の建物が日本軍によって爆破された事件があった。魯迅の2番目の弟周建人が商務印書館に勤める編集者で、10年以上のキャリアを持つ館員だった。仕事場が爆破されたせいで仕事を失ってしまった。そのことで魯迅は友人への書簡の中でその憤りと不満を漏らしたことがある。

「商務印書館の刊行物は、抗日の字句を入れようとしません。このことに関する文章は、『東方雑誌』が付録一つをつけただけですし、本そのものには閉じ込めず、即かず離れずという状態にしてありました。しかし日本は察せず、思うに、やはり商務印書館を排日の大本営だと思っていたのでしょう。印書館の建物は早くに爆破され燃え上がり、王公の邸宅も妓館におちぶれはてました。いまでも門前はまだ紅い提灯が光りかがやき、夜間に散歩してここを通るたびに、これがために慨嘆の気持ちを起こします。」<sup>25</sup>

「王公」とは商務印書館総支配人兼編訳所所長王雲五のことだが、この手紙で表された憤りは弟が勤める出版社支配人の墮落に対するのみならず、「抗日」という言葉さえ使っていない商務印書館を爆破した日本軍にも向けている。

これまでは、魯迅は日本に対して不満がある場合、日記や書簡に記していたことがあっても日本人に向かって怒りを顔に出したことはなかった。ところが、1936年（同年10月19日に魯迅は逝去）になって、様子が一変したのである。

同年2月3日唯一の日本人弟子増田渉宛の手紙の中で、魯迅はついに日本文学者たちの「驕り」に対する憤りを爆発させた。

1935の5月19日と10月21日、魯迅は内山書店店主内山完造が設けた宴会で有名文学者長与善郎と野口米次郎らと会っていた。二人とも大東亜文学者大会の推進者だったが、いずれも内山完造の紹介で魯迅と知り合ったのである。『魯迅日記』を繙き、また当事者野口と長与両氏が帰国後に書いた会見記をみれば確認できる事実であるが、特に詩人野口米次郎の場合は、当時日本政府からインドとの文化交流の仲介と留学生受入れの交渉使命を負い、カルカッタ大学へ訪れる途中わざわざ上海に寄り、『朝日新聞』上海通信局長木下猛と内山完造の斡旋で魯迅との会見を実現させたという。魯迅とは初対面だが、「手に小さな猪口を弄りながら」敏感な政治問題や中国の歴史などなんでも憚ることなく語った魯迅の印象は「梅の老木といったような感じ」だったと野口は事後書いた。会見時に中国知識人の指導的な立場にある魯迅に向かって、「インドにおけるイギリス人のように、どこかの国を家政婦のように雇って国を治めてもらったら、一般民衆はもっと幸福かもしれないよね」と挑発的に聞いた。すると、魯迅はすかさずに「どうせ搾取されるなら外国人より自国人にされたいね。詰まり他人に財産を取られるよりも自分の俸に使われた方がいいように…」と野口の挑戦を撥ね返したという<sup>26</sup>。

無論、野口の言う「どこかの国」というのは日本のことを指していることが明らかで、日本

25 『魯迅全集』14巻 p591。1932年8月1日魯迅書簡「許壽裳宛」、学習研究社昭和60年6月25日出版。

26 野口米次郎「渡印通信第一回、魯迅と語る」、『東京朝日新聞』1935年11月12日。

軍の中国派兵を「家政婦みたいに中国に雇われている」ものだと正当化したがつているというのも見え見えである。しかし魯迅は譲らなかつた。それはあくまでも「搾取」であり、しかも「他人の財産を取」ろうとする強盗行為で他ならないと反論した。このような魯迅が持つ凛々しさはかつて日本人との交友関係の中で見たことはないのである。

会見数ヶ月後、魯迅は「僕は日本の作者と支那の作者との意思は当分のうち通ずる事は難しいだろうと思う」と書いた<sup>27</sup>。これがそれまでになかつた魯迅の重大な発言だと筆者は思っている。

いってみれば、中日関係に関する魯迅の態度表示である。両国の文学者たちの善意による意見交換や交流を推し進めてきた魯迅だったが、ここまで我慢してついに互いに意思の疎通は「当分のうち」難しいだろう、という幻滅的な結論を出したのである。その言葉には、両者は互に通じないのであれば、「付き合ってもしかたがない」という含みさえ読み取れる深い考えがあると筆者は思う。筆者が思うには、第一次上海事変から日本と日本人に対する信頼が徐々に崩壊し、その不信感がピークに達し、幻滅を覚えたのは、その後長与善郎と野口米次郎が書いた虚偽のインタビューを見た時だった<sup>28</sup>。

盧溝橋事変が勃発する2年前にあった、日中両国トップレベルの文学者のしのぎを削るような後味の悪い会話にこそ、魯迅が自ら私信でこぼした「中日両国の知識人は互に通じない」という言葉の真意が隠されていると筆者は考える。

## 五、文学者陶晶孫の関わり

拙論「戯曲〈ファッショ細菌〉の成立について」<sup>29</sup>で紹介したように、文学グループ創造社同人だった陶晶孫は上海自然科学研究所が1931年4月1日に開所した7ヶ月後に日本側の関係者からの推薦を受けて衛生科研究員として招聘され、戦後研究所が中国側に接収されるまで研究所に在籍した人物である。在所期間は倶楽部学会会の機関紙『自然』よりも長い。研究所内部の人間だから『自然』にどのような関わりをしていたのか、そして作品を発表したことがあるのか無いのか。あるとすればどのような作品だったのか。これらの問題は従来陶晶孫研究の中で未見なので、きちんと整理したい。

陶晶孫の本名は陶熾である。『上海自然科学研究所彙報』ではすべて本名で論文を発表している。ところが、『自然』では本名「陶熾」以外、文学者としていつも使う「陶晶孫」、そしてペンネーム「陶蔵」など何気なく使っていた。

『自然』へは、陶晶孫は投稿者として関わっていた他に、学芸部委員として指導的な立場から雑誌編集への関わりもあった。次に、『自然』創刊号から終刊号までの順で陶晶孫の関わりを見

27 『魯迅全集』16巻 p584-585。1936年2月3日魯迅書簡「増田渉宛」、学習研究社昭和61年5月6日出版。

28 野口米次郎「魯迅と語る——梅の枯木といった感じ」（渡印第一信）、東京『朝日新聞』1935.11.12（市内版）；長与善郎「魯迅にあった夜」、『経済往来』（日本評論社）1935年7月号。

29 福岡女子大学『国際社会研究』第3号 p14、2014年3月発行。

てみることにする。

『自然』創刊号は1935年6月10日に発行された。中国人所員の投稿は、崔青鼎の短編小説しかなかった。陶が関わったということを裏付ける資料はない。

第2号は1936年1月31日に発行された。扉の頁に胡適の凜とした風骨のある「自然」の二文字が表紙にあるふあっとした魯迅の題字とは対照的である。中国人スタッフの投稿は三編に増えたものの、内容といえは今ひとつ特色がない。新会員黄素封が投稿した中国語文「関於数目的話」がそのまま掲載されたこと自体は大きな意味を有する。それは創刊時に想定すらしなかったであろうことだが、今後は日本語文のみならず、中国語文も発表できる、という編集方針の転換を宣言したかのように見える。

さらに、この頃学芸部の指導態勢が大きく変わる選挙結果が出た。『自然』創刊翌年の12月28日に開かれた研究所倶楽部総会で学芸部役員の組織改組が行われ、中国人古参研究員陶熾が選出された。小宮義孝、西村捨也の二人は続投、木村重の後任に陶熾がなった。小宮は陶とは古い仲で西村も中国語は堪能である。学芸部の役員は指導的な立場にあるため、機関誌『自然』には直接編集に加わったり、間接的に助言をしたりして、文学の特色を最初から色濃く持つ『自然』は、郭沫若らと創造社を興したベテラン文士陶晶孫が加わったことで、今後は濃厚な中国的な要素が入ってくることを意味していた。実際第2号から古典よりも同時代中国文学の翻訳作品が増えたのもその反映だし、さらに、胡適に題字の揮毫を頼んだのも陶晶孫であろう。主任編集員を務める西村は「編集雑記」に、「今年は当部委員に陶先生を迎えて喜びに堪えない。新陣容を整えて大いに仕事をするつもりである」と書いた。

1936年7月14日に発行された第3号には文学好きな日本人研究員梅田潔によって翻訳された郭沫若の歴史小説「司馬遷発憤」が関心を集めた。投稿数から見ると、中国人所員の投稿はさらに増えた。第2号にある「倶楽部の頁」によれば、学芸部部長の小宮が急遽ドイツ研究出張になったので後任は新城会長により前委員の木村重が再任された。「編集のお手傳」によれば、小宮は洋行中、同じ学芸部役員でもある編集主任の西村も出張不帰のため、陶熾から指示を仰ぎつつ図書館司書補佐員の川勝糸路が第3号の原稿募集から編集作業を担当した。「筆の戯れ」と自虐した原稿募集の案内文は陶熾の手によるものだということが初めて判明した。

第3号「編集後記」は主任編集委員西村が帰所して自ら書いたもので、「文芸筆陣の寂寥の折柄、同氏（梅田潔）の訳稿「司馬遷発憤」を登載することができたのは編集子として殊に嬉しい」と、郭沫若の作品の掲載に触れた。その時郭沫若は日本亡命中なので、文学活動（本の出版や雑誌における作品の掲載など）はすべて停止したわけではないが、指名手配人物なので「郭沫若」という本名の使用は極力避けられていた。『自然』は日本語雑誌とは雖も、上海自然科学研究所内で発行された非売品だから、一つの例外と言えよう。作者本人がその翻訳と掲載を知っているかどうか知る由もないが、同じ前期創造者同人の一人であり、妻も実の姉妹である陶熾がこの作品を梅田潔に推薦した可能性は十分あると筆者は思う。

1936年11月1日に発行された第4号は中尾博士追悼号である。故中尾万三氏の弟子の曾広方研究員を始め、多くの所員が追悼文や回想記を書いた。陶晶孫は師弟関係になかったからか、

追悼文ではなく「中国の諺に寄せて」という題で雑文を書いた。

「編集後記」によれば、第4号の編集部は曾広方、黒屋政彦、木村重、木村康一、陶熾、笈三郎、西村捨也の7名からなっている。主任は曾広方である。突然病死した中尾氏の追悼号だから研究所内外の関係者から追悼文を集めるために中尾氏の弟子曾広方に編集責任を任せただろう。不慣れのせいか、「編集後記」だけは西村捨也が執筆した。文学好きな西村は縁のある魯迅の逝去に触れ、「十月十九日魯迅周樹人氏は当地の寓居で長逝された。『自然』の表題を書いて戴いた魯迅先生、折も折とてこの文豪を失ったことは傷心の限りである」と追悼の辞を述べた。

第5号は1937年5月20日に発行された。陶晶孫は「陶蔵」というペンネームで評論「陶蔵の弁」を発表したことの外に、胡適の名作「読経平議」と郁達夫の初期代表小説「沈淪」の二編がそれぞれ梅田潔と西村捨也によって翻訳されたことが注目に値する。

第5号 p188にある「研究所雑記（1936年5月～1937年4月）」では、「1936年10月17日に開かれた第15回「学術講演会」は陶熾が担当した＜中国における衛生統計＞となっている。」これは同号 p150-151に掲載された「陶蔵の弁」で書かれたことの裏付けになっている。

今回の一次資料の調査で判明したことだが、『自然』に掲載された陶晶孫（陶熾、陶蔵などの名前で発表されたものを含めて）の作品は、14号に掲載された「息子への手紙」と12号にある「同懷四弟惠孫配松本夫人墓誌銘」（中国語文）を除いて、すべて1944年5月華中鐵道總裁室弘報室から出版された『陶晶孫日本文集』（華中鐵道江南叢書2）に収録されている。

第6号は1937年12月1日に発行された。時は盧溝橋事変勃発およそ5カ月後。雑誌の変化が一目瞭然である。あるはずの魯迅の題字は表紙から消え、「自然」の二文字は緑地に白抜き楷書印刷体太字に替えられた。陶晶孫は『曼殊書信に見える彼の健康に就て』（上）を発表している。学問の薫りは高いが、作者の身が置かれた社会や生活臭が全く嗅げない一編である。

第6号の「編集後記」には事変後雑誌の発行に関する記述には、初めて「戦火」の匂いを感じさせるものがあった。従来堅持してきた『自然』の人文的薫りにこだわりつつ、時勢（戦争、大東亜共栄という国家思想）にこちらから頑なに距離を置く姿勢が見られる。『自然』から「時勢」との関連付けを排除しつつも「大東亜共栄」の思想とは別世界にある純粋な文学と芸術を守り続けようとするのは無力とはいえ、科学者たちの戦争への抵抗だと言える。

戦争の恐ろしい影が知らず知らずのうちに近くまで忍び寄ってきた。いままで『自然』の編集方針として「時事」に対してできるだけ目をつむるように心がけてきたが、第6号には研究所の目の当たりにある事変の様子を視覚的に捉えられるように新たな口絵を入れた。所員富田軍二が撮った三枚の写真だが、バリケートや憲兵が映っている。

1938年6月5日に発行された第7号は、「編集後記」を綴った野口編集員の記述によれば、「自らなる事変色が全巻を覆っている」。研究所にいる科学者たちはもはや戦争という目の前にある現実を受け入れざるを得なくなったのである。彼らは「事変下の現地に在る吾々の記録として」雑誌の変貌を容認せざるをえなかった。具体的には木村康一の「江南の農業」と小幡の「北支の石炭及鉄」の二編は「現在の国策の要望に応じて」いたことを示す記事などが挙げられるが、



陶晶孫は相変わらず時勢には即かず離れずで、発表した作品は1938年2月11日に起きた身辺事を記録した「アパートの日記」である。

第8号は1939年3月31日に発行された。新城所長追悼号となっている。表紙から消えた魯迅題字も所長がかつて好きだったということで一時復活された。陶晶孫の投稿は「弱虫日記より」である。

1940年1月25日に発行された第9号には陶晶孫の作品が複数掲載されている。一つは9ページもある長文「中国衣食住管見」で、もう一つは「留守番日記」である。「蘇曼殊愛用の拓本」という作品は、陶蔵と小沢正元二者の共著になっているが<sup>30</sup>、小沢正元が書いたのはその拓本の入手経緯と物知りの陶蔵にいろいろ教えて貰ったことだけで、文章の殆どは陶蔵が執筆したものである。結びに「私は雑誌『自然』の知遇を得ている。そのために小沢氏に文を乞ふて忙中短文を得た」と書いた。『陶晶孫日本文集』に収録された際、小沢氏が書いた冒頭文の後に小沢正元の署名はあるが、文章全体は陶晶孫の単著として扱われている。

1940年8月1日に発行された第10号は肥田達太郎追悼号である。陶晶孫の投稿はない。

1941年5月10日に発行された第11号には陶晶孫の署名文は二つある。本名陶熾で発表された中国語文「同懷弟陶烈府君墓誌銘」と陶蔵で発表された「通勤日記」である。他に陶晶孫の手によるものらしき「曼殊書信に見ゆるその経済状況」という一文がある。しかし、作者は「朱作子」と名乗っている。調べた結果、前文に触れた『陶晶孫日本文集』には同一の文章が収録されているので、「朱作子」が陶熾本人であることが判明した。従来の研究で知られていないペンネームである。

1942年6月10日に発行された第12号といえば、一番注目すべきものは巻頭に飾った三代目の研究所所長兼倶楽部会長の佐藤秀三の文章「大東亜の科学振興に就て」である。太平洋戦争が始まってから研究所が急激に国策擁護に大きく傾斜していく中、所員陶晶孫は益々自分という殻の中に閉じ籠るようになり、『自然』に発表したものもより一層「私的」になり、同郷の王梅堂氏（同所所員）の協力を得て、中国語で家族の墓誌銘を二本も発表している。陶晶孫は故人となった弟陶烈（字は恵孫）夫婦のために「同懷四弟恵孫配松本夫人墓誌銘」を書き、王梅堂は陶晶孫の父親の墓誌銘「無錫陶公念鈞墓誌銘」を代筆したのである。この中国語で書かれた二編の墓誌銘は今まで発表されたことはなく、陶晶孫研究にとって重要な意味を持つ未発見史料と位置付けても妥当であろう。全文の引用は紙幅の関係で割愛するが、その家族に関する重要な研究情報を二つほどここで公開したい<sup>31</sup>。

（一）陶烈は東大医学部を出た天才脳研究者だった。生年月日は光緒25年（1899）12月22日（従来の研究論文で見たものと違う）。急疾患をわずらい、民国19年（1930）8月21日に横浜のある病院で逝去。ご夫人の松本時子は光緒34年7月10日の生まれで民国20年1月3日東京の実家で服薬自殺を図り夫の後を追った。10年後の1941年9月6日松本時子の遺骨は無錫に戻り、

30 『自然』第9号目次では、小沢が第一著者、陶が第二著者になっている。

31 『自然』第13号 p92-93。

夫の陶烈の墓に合葬された。そのために長男陶晶孫は墓誌銘を書いてあげたのである。

(二) 陶晶孫の実家家族全員の名前が初めて判明した。父陶廷枋、同治壬生年9月15日無錫北塘に生まれ、民国35年5月19日逝去。母張夫人。陶晶孫は長男、男兄弟6人、本名は陶熾、陶烈、陶煒、陶照、陶煌、陶熙；姉妹10人、慰孫、虞孫、愉孫、惕孫、瀛孫、愷孫、守正、守愚、守墨、守玉。

第13号は1943年12月25日に発行された。陶晶孫は散文「烹齋雜筆」を発表している。単行本『陶晶孫日本文集』にも同じ内容のものが収録されているが、初出のここでは「佐藤みさは訳」となっている。佐藤みさはとは、ご夫人のことである。当時子供達を上海に連れてきて夫と同居していた時期があり、その間に夫が中国語で発表した『烹齋雜筆』を日本語文に訳出したのであろう。

終刊号の第14号は中野嶽三氏追悼特集で、1944年11月16日に発行された。陶晶孫の投稿は「息子への手紙」である。紙幅の関係で内容の公開は割愛するしかないが、この4000字余りの手紙は従来どこにも発表されていないものなので、貴重な軼文の扱いをするのは妥当だと考える。

## 終わりに

以上、上海自然科学研究所から発行された雑誌『自然』をめぐって鲁迅と陶晶孫のような有名文学者の関わり方を見てきた。上海は第二次上海事変から事実上日本軍の占領区域になり、鲁迅はその前には病死したが、陶晶孫は息苦しい生存環境にしながら終戦まで同研究所で働いた。

上海自然科学研究所は1939年1月から所管が興亜院に移された。運営目的も「上海自然科学研究所ハ支那ニ於テ自然科学ノ学理及其ノ応用ヲ研究シ支那ニ於ケル斯学發達ヲ期スルヲ以テ目的トス」<sup>32</sup>と、自然科学の純粋な追求から応用面が何よりも重視される国家機関へと変貌したのである。興亜院は1942年11月、大東亜省に改組されるが、研究所は敗戦まで運営された。一方、日本国内では上海自然科学研究所の「理論的な研究」に対する批判が相次ぎ、「時世の要求に応じ」るべきで、「多額の国費を費やした研究所は、もっと直接に日本の国策に応じる方向に研究を統制すべき」だと今までにない圧力がかかってきた<sup>33</sup>。その後研究所に与えられた「時勢に順応する任務」には、「占領地区内の図書文件の接收保管」、「占領地区内の学術標本の接收保管」、「占領地区内の医事関係」、「化学試験の引受」、「衣糧薬剤方面の研究」、「獣医部の細菌検査」および「電離層の測定」など戦時下において実用性の強い事業依頼があったことが明らかにしている<sup>34</sup>。

32 「上海自然科学研究所規程（1940年12月27日）」、『上海自然科学研究所十周年記念誌』（上海自然科学研究所、1942年）所収、p173-174。

33 新城新蔵「方針」、『自然』第7号 p2-6、上海自然科学研究所倶楽部学芸部1938年6月発行。

34 『上海自然科学研究所十周年記念誌』p25-27。